

### 一噌流笛方能楽師・島田巳久馬の経歴について

森田, 都紀

---

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2023-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026735>

# 一噌流笛方能楽師・島田已久馬の経歴について

森田 都紀

## はじめに

島田已久馬（一八八九～一九五四）は大正・昭和期に活躍した能楽笛方の能楽師である。熊本県で生まれ、笛方一噌流の正木利三郎に入門したが、明治四十四年（一九一〇）に十代で上京した。上京後は一噌流十二世一噌又六郎に師事し、一噌流の笛方として活動した。十三世宗家一噌鉄二の戦死により、昭和二十三年（一九四八）から亡くなるまでのあいだ一噌流宗家代理を務めた。第二次大戦前後の激動の時期に流儀の発展と継承に尽力した重要な人物であるが、活動の詳細はほとんど明らかではない。そこで本論文では、平成三十年（二〇一八）度に法政大学能楽研究所蔵となつた島田已久馬旧蔵資料<sup>i</sup>をもとに、『能楽』『謡曲界』『能楽画報』等の能楽関連雑誌の記事や能番組、さらに「能楽タイムズ上演データベース」<sup>ii</sup>「現代能狂言上演記録データベース」<sup>iii</sup>等も参照しながら、島田の経歴を紐解いてみたい。

## 一、熊本における活動

島田は明治二十二年（一八八九）に生まれた。島田による回顧録「蒔絵を棄て、」<sup>iv</sup>によれば、島田家は細川家の旧家臣で、父は私塾を営み、兄はそこで教師をしていた。父と兄が喜多流の謡を嗜んでいた影響で、島田も喜多流の謡と仕舞をシテ方喜多流の友枝三郎に師事した。もともと能楽師になるつもりはなく、小学校卒業後は乙種の工業学校に入学して蒔絵を専攻した。

工業学校在籍中の十六歳頃には、友枝三郎の勧めにより笛方一噌流の正木利三郎に入門し、笛の稽古を始めた。先の回顧録によれば、正木に入門した約一年後の十八歳頃に熊本市藤崎神社にて行われた〈融〉で初舞台を踏んだという。今回、雑誌掲載の能番組からその記録をみつけることはできなかったが、同じ頃と思われる明治四十一年（一九〇八）に以下の舞台で笛を吹いたことが認められる（以下、傍線は引用者による）<sup>v</sup>。

・〈八島〉シテ友枝仙十郎、ワキ牟田清道、笛島田三熊、小鼓齋藤豊慰、大鼓清水嘉平

〈祝言〉シテ友枝三郎、ワキ牟田清道、笛島田三熊、小鼓吉川半十郎、大鼓石寺九郎、太鼓蓑田寛明

以上、明治四十一年九月十日、於熊本市藤崎神社

・〈三井寺〉シテ友枝為城、ワキ森利三郎、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓清水嘉平、明治四十一年九月十九日、北岡神社九百七十五年祭神能、於北岡神社

・〈源氏供養〉シテ桜間林太郎、ワキ森利三郎、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓石寺九郎、明治四十一年九月二十日、北岡神社九百七十五年祭神能、於北岡神社

・〈田村〉シテ友枝為城、ワキ牟田清道、笛島田三熊、小鼓吉川半十郎、大鼓角宇三郎

〔六浦〕シテ柴田鼎、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓藤本善作、太鼓蓑田寛明

以上、明治四十一年九月二十七日、於熊本市友枝稽古舞台

雑誌を辿る限りでは、これらの舞台が島田の初期の活動といえそうである。続く、翌四十二年(一九〇九)と四十三年(一九一〇)にも以下の舞台で笛を吹いたことが認められる。

明治四十二年(一九〇九)

・〔朝長〕シテ富永猿雄、ワキ牟田靖道、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓石寺九郎、太鼓蓑田寛明

〔山姥〕シテ桜間伴馬、笛島田三熊、小鼓三須平司、大鼓石田清吉、太鼓増見仙太郎

〔歌占〕シテ片山多膳、ワキ中村忠次郎、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓清水嘉平

〔狸々〕シテ桜間金太郎、ワキ井上武眞、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓清水嘉平、太鼓蓑田寛明

以上、明治四十二年四月二十四日、出水神社春季御小祭能楽組、於熊本市出水神社

・〔嵐山〕シテ桜間林太郎、ワキ中村忠次郎、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓清水嘉平

〔雲雀山〕シテ友枝三郎、ワキ牟田靖道、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓清水嘉平

〔竹生島〕シテ興繩進、ワキ木岡常次郎、笛島田三熊、小鼓宮本健次郎、大鼓石寺九郎、太鼓高田宅次

以上、明治四十二年五月十四日、桜間林太郎能舞台建設上棟式興行、於桜間林太郎能舞台

・〔放下僧〕シテ友枝仙十郎、ワキ花咲善平、笛島田三熊、小鼓吉田勝治郎、大鼓清水嘉平

〔俊寛〕シテ桜間伴馬、ワキ井上武眞、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓石寺九郎

〔邯鄲〕シテ桜間金太郎、ワキ木岡常次郎、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓藤本善作、太鼓高田宅次

以上、明治四十二年五月十五日、桜間林太郎能舞台建設上棟式興行、於桜間林太郎能舞台

・〈兼平〉シテ藤本理三、ワキ中村忠次郎、笛島田三熊、小鼓吉田勝治郎、大鼓清水嘉平

〈松風〉シテ桜田伴馬、ワキ茶咲善平、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓藤本善作

〈藤戸〉シテ友枝三郎、ワキ井上武眞、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓石寺九郎

〈紅葉狩〉シテ桜間林太郎、ワキ井上文水、笛島田三熊、小鼓宮本健次郎、大鼓石寺九郎、太鼓蓑田寛明  
以上、明治四十二年五月十六日、桜間林太郎能舞台建設上棟式興行、於桜間林太郎能舞台

明治四十三年(一九一〇)

・〈箆〉シテ友枝敏樹、ワキ木岡常次郎、笛島田三熊、小鼓齋藤豊慰、大鼓石幸九郎

〈鉢木〉シテ友枝三郎、ワキ井上武吉、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓清水嘉平

〈是界〉シテ桜間林太郎、ワキ木岡常次郎、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓石寺九郎、太鼓友枝敏樹  
以上、明治四十三年(日時不明)、紀元節祝賀能、於熊本市中学濟々学

・〈美盛〉シテ富永楯雄、ワキ高田十市、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓石寺九郎

〈雲雀山〉シテ友枝敏樹、ワキ木岡常次郎、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓石寺九郎、太鼓蓑田寛治

以上、明治四十三年三月二十日、熊本喜友会、於熊本市友枝三郎宅

・〈鶴龜〉シテ桜間林太郎、ワキ木岡常次郎、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓角卯三郎、太鼓高田宅次

〈景清〉シテ友枝三郎、ワキ井上武眞、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓清水嘉平

〈安宅〉シテ桜間伴馬、ワキ井上武眞、アイ野中喜次郎・坂梨弥三郎、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓清水翁平  
〈春日龍神〉シテ友枝敏樹、ワキ茶咲善平、笛島田三熊、小鼓吉田勝次郎、大鼓石寺九郎、太鼓高田宅次

〈角田川〉シテ桜間伴馬、ワキ茶咲善平、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓藤本善作

〔鞍馬天狗〕シテ桜間金太郎、ワキ木岡常次郎、笛島田三熊、小鼓速水善作、大鼓清水嘉平、太鼓高田宅次  
 以上、明治四十三年四月二日・三日、熊本金桜会、於熊本市錬兵町金桜会能舞台

・〔実盛〕シテ富永猿雄、ワキ井上文水、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓石寺九郎、太鼓高田宅次

〔藤戸〕シテ桜間林太郎、ワキ井上武眞、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓清水嘉平、太鼓高田宅次

以上、明治四十三年十月七日、出水神社御大祭、於熊本市出水神社

・〔弓八幡〕シテ友枝仙十郎、ワキ牟田靖道、笛島田三熊、小鼓上田小三郎、大鼓角卯三郎、太鼓友枝敏樹

〔羽衣〕シテ友枝仙十郎、ワキ牟田靖道、笛島田三熊、小鼓桜間眞次、大鼓角卯三郎、太鼓友枝敏樹

〔嵐山〕シテ桜田道雄、ワキ牟田靖道、笛島田三熊、小鼓桜間眞次、大鼓角卯三郎、太鼓友枝敏樹

以上、明治四十三年十月十五日、羽根八幡宮御大祭、於熊本市羽根八幡宮

これらの記録より、上京前の島田は友枝氏や桜間氏の引き立てを受け、両家の稽古能や地元の藤崎神社、北岡神社、出水神社、羽根八幡宮等が主催する能会に出ていることが窺える。

ところで、これら初期の能番組では、現在では「已久馬」と表記される島田の名が「三熊」と記されている。それゆえ、「三熊」が島田の本名であろう。以後は能番組での表記は変化しており、調査の限りでは大正五年（一九一六）頃からは「已熊」、大正七年（一九一八）頃からは「已久馬」等もみられる。そして大正末期頃より「已久馬」の表記が主流となり、昭和初頭からはほとんどで「已久馬」と記されている。<sup>vi</sup>

さて、工業学校卒業後の島田は地元熊本漆器製造所に就職して蒔絵に従事した。しかし、両親との死別をきっかけに明治四十四年（一九一）に上京する。先の回顧録によれば、漆器製造の仕事を探していたところ幸清流小鼓方の上原竹之輔と出会い、幸清流十二世幸清次郎に引き合わせられた。その際の清次郎の「笛が吹けるなら非常に都合が

い、から、私の家に居るがい、」の一言で清次郎家に下宿することが決まり、清次郎より小鼓も習うことになったという。<sup>vii</sup> 清次郎と師弟関係にあったためか、島田巳久馬田蔵資料にも幸清流小鼓手付が多く含まれ、島田が実際に稽古で用いたと思われる手付もみられる。後述するように、この時期の清次郎は、謡本の刊行をめぐる観世宗家に破門扱いされたシテ方観世流の観世喜之を支えるために奔走し、一門で九臈会の舞台に立っていた。九臈会の囃子方不足に悩んでいた清次郎にとって、能の経験のある島田は活動を共にできそうな有望な人材に映ったはずである。上京後の島田が笛方として活動を始めた背景にはこうした清次郎との関係があったことが推察される。

## 二、上京 ―九臈会との関わり―

上京後、島田は明治四十四年(一九一)四月九日に観世会月並能で(俊成忠度)(シテ観世清久、ワキ宝生新、笛島田三熊、小鼓大倉喜太郎、太鼓大倉宣利)の笛を吹いている。今回調査した限りでは、この舞台が上京後のものとしては最も早い時期のものと思われる。以後、五月には、

・(巴)シテ橋岡久太郎、ワキ大友信安、笛島田三熊、小鼓大倉喜太郎、大鼓高安鬼三、明治四十四年五月七日、観世会月並能、於観世舞台

六月には、

・(鉄輪)シテ観世清久、ワキ宝生新、笛島田三熊、小鼓荒木賀光、大鼓大倉繁次郎、太鼓松村言吉、明治四十四年六月四日、観世会

・(蟬丸)シテ友枝敏樹、ツレ正木亀三郎、ワキ野島信、笛島田三熊、小鼓大倉喜太郎、大鼓亀井俊雄、明治四十四年六月十一日、喜多会青年部、於飯田町喜多舞台

・(葵上) シテ山階徳次郎、ワキ野島信、笛島田三熊、小鼓大倉喜太郎、大鼓齋田喜一郎、太鼓松村言吉、明治四十四年六月二十三日、山階活楽会、於山階舞台

七月には、

・(熊坂) シテ和泉鷹三、ワキ野島信、笛島田三熊、小鼓伊藤松翠、大鼓石田清吉、太鼓松村言吉、明治四十四年七月十九日、山階の演能、於山階舞台

・(狸々) シテ宝生勝、笛島田三熊、小鼓小早川靖二、大鼓石田清吉、太鼓観世元規、明治四十四年七月二十三日、宝生会

などが雑誌掲載の能番組に認められる。観世流を中心に宝生流や喜多流の能会に出勤し、順調に活動を開始していたことが判る。

一方で、この時期の島田は幸清次郎を介して九臈会と関係を深めつつあった。そのことがこの後の活動に大きく影響を与えるので、ここで島田と九臈会との関わりについて詳しく述べておこう。

この頃、九臈会の観世喜之は重習を含む改訂本を出版したことを理由に明治四十四年(一九一)三月をもって観世流二十三世観世清廉より破門されていた。よく知られているように、この問題の背景には同年二月に丸岡桂が観世清之校訂の『観世流改訂本』を刊行して檜常之助に告訴された出来事があった。破門となった喜之は、落成したばかりの観世喜之家舞台にて独自に活動を始めようとする。こうした一連の動きに対し、清次郎は『能楽画報』に「邪論を排す<sup>viii</sup>」と題する次の文章を寄せている。

(略)改訂本刊行の由来が既に斯くの如きものである以上、其の累を蒙った喜之は豪も破門せらる、理由なきものである。五流宗家の申合せと云ふ事を振り廻してゐるが、然らば梅若は奈何?(略)私は断じて不道理に腹する事



は出来ぬ、此故に私は喜之に與するものである。清次郎は、正理に向つて突進する上に於て、何等の躊躇もなければ、又何等の未練もない。

右にあるように、清次郎は孤立した喜之を全面的に支持し、一門を率いて九皇会に出勤することを決意した。同年五月六日に催された「三番の能と二番の囃子の会」が破門後最初の九皇会の催しである。(吉野天人) (袴能)、(敦盛)、(松風)等が演じられ、出演者の詳細は不明であるものの清次郎一門が役籍を越えて小鼓以外の囃子も勤めた。この催しを観劇した坂元雪鳥は「喜之陣頭に立つ―九皇会の袴能―<sup>ix</sup>」という能評を著しているが、清次郎らが孤軍奮闘していた様子がよく判るので少し長いが引用したい。

観世喜之が宗家の破門に遭ひて、独立の態度を示すや、人或はこれを悔りて曰く、彼能く何をかせん、幸清如何に力むとも、小鼓一調にては能は演じ難し、「翁」の舞と「道成寺」の乱拍子のみにては滑稽ならんと。何ぞ知らん鎮まり返つたる数ヶ月の間に、幸清次郎は其門下をして、四拍子何れをも勤めしむるに至れり。喜之たる者茲に於てか躍起せざる可からず、果然其新しき舞台に於て新しき能は催されたり。(略)囃子方は愛吉、望月、上原、富田等交互に敷役を引受け、望月の如きは四拍子ともに勤めて、従来専門家のみを見馴れたる者を驚倒せしめたり。此日の能の出来栄に就ては、實際を云へば最初より余り注意を拂はず、只管其意気と覚悟とを見んと志したるが、堅実なる芸風、剛健なる謡口、優に此流の特色を示したる上に、一同が余程深き決心を定め、努力し来れるを悟らざるを得ざりき。(略)

「愛吉」は清次郎養子、「望月」は望月桂、「上原」は上原竹之輔、「富田」は富田直吉であるが、彼らが囃子全般を勤めたことに観客が驚愕した様子が伝わってくる。雪鳥は「従来専門家のみを見馴れたる者を驚倒せしめたり」とし、相当の覚悟をもってなされたこの舞台を「新しき能」と評価した。

続けて同年六月十七日には、定期能としての「第一回観世九皇会」が行われ、〈清経〉（シテ斯間田滑泉、ワキ遠山江北）、〈百萬〉（シテ観世喜之、ワキ遠山江北）、〈小鍛冶〉（シテ中村伊織、ワキ川本保雄）、〈蚊相撲〉（シテ水野素舟）、〈無布施経〉（シテ鷺畔翁）などが上演された。<sup>x</sup> 清次郎一門の力添えを得て、九皇会のシテ方がワキ・囃子もこなし、狂言に鷺流の鷺畔翁らが出演して何とか開催にこぎつけている。この催しを観劇した雪鳥は「能の出来は誠に立派であった」と喜之を評価し、囃子についても「同じ顔触ながら幸清門下の囃子方が、前回（※五月六日）「三番の能と一二番の囃子の会」より余程落ち着いて来たのを認めた。」（括弧内は引用者による）と述べている。<sup>xi</sup>

注目したいのは、続く七月二十三日の観世九皇会にて島田が笛を吹いていることである。島田は〈竹生鳥〉（シテ川本保雄、ワキ中村伊織、アイ中島濤嶺、笛島田三熊、小鼓吉田節斎、大鼓幸愛吉、太鼓望月桂）と〈松虫〉（シテ観世喜之、ワキ遠山江北、笛島田三熊、小鼓望月桂、大鼓上原竹之輔）の笛を勤めた。この舞台を観劇していた雪鳥は「幸清翁の気焰―九皇会袴能―」<sup>xii</sup> という文章を寄せ、清次郎一門の覚悟を「並大抵の事ではあるまい」「豪いと云ふに値する」と評している。

此舞台で殆ど総後見の責任を負ってゐる幸清翁が、其氏に対して「此位までに仕立てるのは容易な事ではありません、まア見て下さい」と気焰を吐いて居たが、成程並大抵の事ではあるまい、と大鼓と小鼓とが同じ育ちだから互に遠慮がなく、動もすると双方からセリ詰る様な気もするが、兎も角も小鼓方が、大も太も勤めて能を演ずるのだから、豪いと云ふに値する。(略)

以降、九皇会の催しに島田も名を連ねているので、この頃には清次郎一門と行動を共にしていたとみてよいだろう。約一ヶ月半後の九月七日、島田は九皇会に出勤したことを理由に十二世又六郎より破門された。上京して半年も経たないうちの出来事で、東京で人脈を築こうとしていた矢先のことだったと思われる。大正四年（一九一五）十二月に

喜之の破門問題が解決するまで、島田は九皇会を中心に、ほかの会派の舞台をほとんど勤めることなく細々と活動を続けている。<sup>xiii</sup>

### 三、一噌流破門

所屬する流儀がなくなり孤立した島田が、破門から約半年後の明治四十五年（一九一〇）三月二十二日に幸清流専属となったことを示す資料がある。島田已久馬旧蔵資料の「幸清流笛相伝免状」（目録番号 D11-6）である。

一 幸流の笛／寫田三熊／右之者拙者流儀／笛取立候ニ付皆伝致候事／明治四拾五年／三月廿二日／幸清次郎（花押）

ここに「拙者流儀笛相立候」とあることから、島田は幸清流専属の笛流儀を創流し、それを清次郎が認めていたことが判る。また、「島田亀（ママ）熊宛幸清次郎書状」（目録番号 D11-7）は年不明ながら前掲の「幸清流笛相伝免状」を出すにあたっての経緯を記したものであるが、島田の笛を清次郎が「幸清流笛」として認め、今後の活動を共にすることを誓っている。

拜啓 陳レハ島田三熊殿事此度小生方／幸清流笛ト相頼ミ長く相用ヒ申度候／間此度御承知置被下度但シ本人承諾之／上ニ有之此段小生ヨリ申上置候尚委細之／義ハ後筆申上候以上／六月十九日／幸清次郎（花押）／島田亀熊殿

こうした資料から考えるに、この時期の島田は清次郎の引き立てがなくては舞台に立てない状況にあったといえるだろう。清次郎一門が支える九皇会のいわば「座付」として活動するほかなかったと推測される。

加えて、島田と幸清流との深い関係を示唆する手付も残されている。島田已久馬旧蔵資料の『幸清流 唱歌拍子

割」(目録番号 B5)は笛唱歌に幸清流小鼓の手組名や粒の名称を書き込んだ島田直筆の手付であるが、「獅子」の手付には「島田流」「幸清流」などと記しているのが認められ、島田が幸清流専属として島田流を自称していたことが窺える。ただ、唱歌をみると一噌流とまったく同じであり、何をもって島田流の「獅子」としていたのかは不明である。また、ところどころ「島田」の印が押された曲目もみられるが、いずれも唱歌は一噌流と同じであり独自の技法はみられない。それにも関わらず「島田」を強調する姿勢からは、破門中の島田が孤立していた様子が伝わってくる。

ところで、この時期の九臈会では変わらず九臈会のシテ方面々がワキ・囃子も勤めるとともに、清次郎一門が囃子全般を担うなど、役籍が乱れる形で上演が続けられていた。しかし観客の反応は変化し、必ずしも初期のように好意的とはいえなかったようだ。かつて「新しき能」と評した雪鳥も大正三年(一九一四)一月に「芸は正確だけでよいか——九臈会発会」<sup>xiv</sup>という能評を寄せ、体制に疑問を呈している。

(略)実は喜之氏の芸が段々荒む様な事はあるまいかと内々気にならぬでもなかったが、今日の「羽衣」を見、且つ内弟子の「岩船」を見ると矢張り堅実を保つて居るものと察せられる。それにしても早く相当の囃子方相手に舞はせて見たい。大鼓と太鼓とは何う考へても変である。当りや粒は正確だらうけれども、芸といふものは此意外に味があるものだらうと思ふ。「羽衣」の舞の囃子が素人耳に騒々しい様では困る。(略)

大鼓と太鼓については「何う考へても変である」と述べ、いくら正確に打つていても聴くに耐えない内容であることを嘆いている。喜之の破門事件から三年あまりが経ち、もはや物珍しさは失せ、技術的な問題に目が向けられるようになっていたのであろう。役籍の異なる者がやりくりする体制は限界までできていたのかもしれない。

そうしたなか、大正四年(一九一五)八月、清次郎は令息の義太郎を後継者に指名し、隠遁することを決意する。同

年八月七日の国民新聞には「幸清次郎翁の和解<sup>xv</sup>」という記事が掲載されている。

幸清次郎氏は囃子方中の元老株であるに拘らず妙な所の張合から観世宗家の破門を受けたる側の味方となり同業者に反旗を翻しつゝ、ありしが今回先非を悔悟して自分は隠居して舞台には出でず孫を引立て、家芸存続の道を計りたしとの申出ありしに付き宝生九郎、喜多六平太の両氏専ら斡旋の勞を取り能楽師一統其請求を容るゝこと、なつたは同流の為は勿論能楽全体の為に賀すべき事である。

清次郎が九臯会を全面的に支えてきたのは「妙な所の張合」によるものであり、そうした清次郎の姿勢が善之の破門問題をより複雑で解決困難なものにしていたとしている。同年十二月に清次郎は隠遁するが、結局、自らが身を引いて問題の解決を図つたということであろうか。これに対して雪鳥は「能楽界時事<sup>xvi</sup>」のなかで次のように述べ、清次郎の判断に安堵している。

(略)何は兎もあれ先以つて結構な事といはねばならぬが、同翁に養成せされた所謂急造囃子方の連中は何う納まるのか、其辺も何れも協定せられた事であらうとは思ふが未だ聞くを得ない。(略)

ここで雪鳥は清次郎のもとで囃子を兼任していた「急造囃子方の連中」の今後を案じているが、そこには又六郎に破門された島田ももちろん含まれよう。こうしたなか、大正四年(一九一五)十二月、喜之は観世流二十四世元滋(のち左近)と和解し、ついに破門問題は解決を迎えたのであった。喜之は大正五年(一九一六)四月二日に観世会に復帰し、観世会催能において(俊成忠度)(シテ観世喜之、ワキ宝生新)のシテを勤めている。

#### 四、一噌流に再入門 — 活動の再開 —

喜之の破門問題が解決したことを受け、島田も一噌流に復帰した。大正四年(一九一五)十二月五日には、観世会に

て（狸々）（シテ山階徳次郎、ワキ光本敬一、笛島田三熊、小鼓幸義太郎、大鼓大倉宣利、太鼓山下博睦）の笛を吹いているのが雑誌掲載の番組表から確認される。

これに先立ち、十二世一噌又六郎から島田宛に一噌流免状が発行され、島田が再入門を果たしたことが島田巳久馬旧蔵資料より窺える。すなわち「島田巳久馬宛一噌流免状一式」（目録番号 D1-1）は大正四年（一九一五）から昭和三年（一九二八）にかけて又六郎から島田に渡された免状十二通であるが、このうち次の六通がこの時期のものである。<sup>xvii</sup>

- ① 一脇能 今般入門二付許致候事 大正四年十月一噌又六郎 島田三熊殿
- ② 一盤渉楽 右相伝致候事 大正四年十一月一噌又六郎 島田三熊殿
- ③ 一小習一色 右相伝致候事 大正四年十一月一噌又六郎 島田三熊殿
- ④ 一盤渉序之舞 右相伝致候事 大正四年十一月一噌又六郎 島田三熊殿
- ⑤ 一翁 右相伝致候事 大正四年十一月一噌又六郎 島田三熊殿
- ⑥ 一狸々乱 右相伝致候事 大正四年十一月一噌又六郎 島田三熊殿

①が入門免状で、②③④⑤⑥が習い物の相伝免状である。わずか二カ月の間に入門ならびに相伝が執り行われ、島田が復帰するための状況が急ぎ整えられたことが判る。

再入門後の島田の活動を雑誌掲載の能番組から辿ると、大正五年（一九一六）を通じて観世会、観世九皇会、山階会等のおもに観世流派の舞台を中心に、宝生会、雛子方演能会等に出勤しているのが認められる。翌六年（一九一七）もやはり観世流が中心で、観世会、観世九皇会、観世会別会、山階会、横浜観世会等に出勤しているが、喜多会、青年会（喜多）、宝生会、雛子方演能会等でも活動している。そして、大正八年（一九一八）頃からは金春会や金剛九曜会、

大正九年（一九一九）頃からは梅若会ほかも加わり、会派も一段と多様になっている。また、管見の限りでは島田が地方で活動していた様子はほとんどみられない。あつても、この時期では大正七年（一九一七）の「故友枝三郎翁追善能会」（四月十三〜十五日、於熊本市公会堂）、大正八年（一九一八）の「幸清次郎翁追善能」<sup>xviii</sup>（四月三日、於名古屋市）、「幸清次郎追善囃子会」（四月四日、於鶴舞公園聞天閣）、「故桜間左陣翁追善能」（五月十七・十八日、於熊本市公会堂）などの追善に関わる特別な催しに限られ、以後晩年まで東京を中心に活動している。

ところで、復帰後すぐの大正五年（一九一六）四月には次の「幸清流取立免状」（目録番号 D2-2）が発行され、島田が清次郎の正式な弟子となっているのが興味深い。

免状 一 当流御執／心ニ付弟子執／立差許候者也／大正五年／四月／幸清次郎（花押）／島田殿

先述の通り、島田は上京してすぐより清次郎と師弟関係にあり、いまさらこのような免状を必要としていなかったはずである。一噌流に復帰して「幸清流笛」や「島田流」を名乗らなくなった島田が、隠遁した清次郎との結びつきをあえて強調するかのような免状にもみえるが、背景は不明である。

清次郎は芸事を弟子の上原竹之輔に、養子愛吉の遺子である義太郎と円次郎の訓育を福井初太郎と田鍋惣太郎に託していたが、この後ほどなくして没した。大正六年（一九一七）九月のことであった。清次郎の追善は立て続けに行われ、島田は同七年（一九一八）の「幸清次郎翁追善能」<sup>xix</sup>（四月三日、於九段能楽堂）や、先述の地方で行われた追善行事において笛を吹いている。こうしたことから生前の清次郎との深い関係が改めて確認されよう。

その後も、活動は順調に継続された。主だった舞台としては、まず大正十五年（一九二六）六月二十五日に九段能楽堂で行われた「能楽協会東京支部（第二回）能」における宝生流十七世宝生重英の〈安宅・延年之舞〉（シテ宝生重英、ワキ宝生新、笛島田三熊、小鼓幸悟朗、大鼓亀井俊雄）がある。宝生宗家を相手に〈安宅・延年之舞〉の笛を勤め

ており、島田が能界で一定の評価を得ていたことが判る。また、九皇会には昭和期に入っても頻繁に出勤していた。観世九皇会の能舞台が牛込区矢来町に落成したことを記念した披露能が昭和五年（一九三〇）九月二十八日に行われた折には、〈石橋〉（シテ観世鍔之丞、ツレ観世織雄・谷村直次郎、ワキ松本謙三、笛島田已久馬、小鼓幸内次郎、大鼓川崎利吉、太鼓金春林太郎）の笛を勤めている。

さらに戦時中には、時局を反映した新作能にも関わっていた。島田已久馬旧蔵資料の「〈忠霊〉頭付」（目録番号 A1—10）は〈忠霊〉の謡本に笛のアシライや舞を鉛筆書きした頭付であるが、表紙に「昭和拾六年新作 十一月十一日相勤ム 華族会館於テ」という島田の書き入れがみえる。〈忠霊〉は昭和十六年（一九四一）十一月十一日に華族会館恩賜能舞台において大日本忠霊顕彰会主催により初演された。同日三回にわたる公演のうち第一回の公演で島田は笛を吹いているが、この資料はその際に用いられた頭付であろう。<sup>xx</sup>このほか、島田已久馬旧蔵資料には「〈義経〉頭付」（目録番号 A1—11）や「〈皇軍艦〉頭付」（目録番号 A1—12）、「〈時宗〉頭付」（目録番号 A1—13）等の新作能の頭付がある。

## 五、一噌流宗家代理として

終戦後、島田に転機が訪れる。一噌流では十三世一噌鉄二が戦死したことを受け、昭和二十三年（一九四八）七月、鉄二の遺族と流儀の重鎮が集まり、今後の方針を決定する重要な会議が開かれた。島田已久馬旧蔵資料にはこのときの会議の内容を記した下書きと控えが存在する（昭和二十三年「一噌流会議控」【目録番号 E1】）。鉄二の遺書により一噌庸二氏がいずれ十四世宗家となることが決まったが、未だ幼少であることに鑑み、当面のあいだは島田が一噌流宗家代理を務めることになった。<sup>xxi</sup>



宗家代理としての島田が笛方の心得を記しているで紹介したい(「一噌流家元代理心得」【目録番号 E2】)。この文書は「昭和二十七年度文部省芸術祭参加公演 先代喜之十三回忌追善能番組」の用紙の裏に「能楽笛方一噌流家元代理」という題目で記されたものである。奥書はないものの、同番組の演じられた昭和二十七年(一九五二)十一月十五日からそう遠くない時期に記されたものであろう。これをみると島田が目指していた笛が具体的に知られるので、少し長い引用したい。

能楽笛方一噌流家元代理／一、先づ笛方は鏡ノ間にて仕手ノ面ヲ見 自分覚悟の／位イト相違アランカラ、ケン トウスベシ。／一、笛方は桂ヲ持つて居ル。／一、笛方は能一番ノ位イヲ保チ最モキンチウシテ／全曲終ルマデ 油断スベカラズ。／一、右ニ付笛方ハアイライ(※ママ)笛最モ大切シテ及ビ／地方ニ受渡シノ間モ細密に研究すべし。／一、舞ハ最モ大切ナレドモシテの動作ニ付キテ／地方と同シ役目ト心得べし。気品クワンキュ勿論。／一、笛のアイシライはシテノ喜怒哀楽ニ順応／スルハ勿論ナレドモ地方の発音に引渡シ／肝要ナリ。決して発音迄ノコスベカラズ。／但シ地方ダレテ活気ナキトキハ笛ニテ／引立ツコト油断アルベカラズ即ち全曲ノ／位ヒヲアズカル故ナリ。／尤も全曲の位取りはシテニ有。笛方は／是ヲ補佐する所以ナリ。／随ツテ謡ノ間取りニ最も注意シ／シテ、ツレ、ワキ、地方ニ受渡肝要ナリ。／追言。明治維新後能楽衰ビノトキ右様ナル心得／地に送り、笛大小太コ唯形丈存スル程度ノノ時期ニハ総テチグハグノ当座余興ノ程度ナリシヲ其子孫に至リテ祖父親ノ父ノ業ヲ本道ノ能楽ト心得当時其ま、／修得し来れる者笛方ニ於テ最もハナハ／ダシ尤モ活計立チ難キ当時ニ於テハ／致し方ナカリシナリ。現今に於テハ世界ノ／能楽ニ進マンガ為笛方ハ先ヅ謡ヒ次に／大小太コヲ修得し是レに／笛同調ヲ研究シテ／始メテ笛方トナルベシ。／尚笛大小太コ半役ナリ。／島田(一噌流代理)

これによれば、島田は能の笛において謡のアシライと舞事をもつとも重要だと考えていた。謡のアシライはシテの喜

怒哀楽の表現に応じて吹き、地謡の発声に配慮しつつ、謡の間合いを尊重しながら吹くことが肝要だとしている。舞事ではシテを引き立てることを心掛け、気品と緩急のある演奏を理想としていた。さらに傍線部にみえるように、島田は能楽を世界に通用するものに成そうとしていたが、まずは謡と大小太鼓をしっかりと学び、謡や他の囃子と一体化した舞台を創ることが笛方として大事であるとも考えていた。

こうした協調性を重視する島田の姿勢は、能だけでなく実生活にも通じていたのかもしれない。というのも、島田巳久馬旧蔵資料の『青色布表紙 習事扣帳』（目録番号 A2―5）の末尾に島田の直筆で「座右の銘」と題して「憎むとも憎み返すな如時迄も憎み憎まれ果てしなければ」「面白き事もなき世を面白く住みなすものは心なりけり」などとみえることから、島田が他人との争いを避け、平和な人間関係を望んでいたことが窺い知れるからである。ほかに「天下の大將ハ御口無調法も一ツの芸」「他人に奥行を見積られぬが何よりの徳」なども書き記しており、本音をあまり語らない性格だったことも窺われる。これらを合わせて考えるに、あくまでも想像の域を出ないが、若い頃に苦境に立たされた経験が能界での立ち振る舞いや舞台観に影響を与えた面もあったのだろうか。いまと違っては確かめる術もないが、他者との調和というのが島田の理想とする能、ひいては人生観でもあったように思われるのである。

さて、後年の島田は大曲の演じられる折にはなくてはならない存在となっていた。昭和二十一年（一九四六）には島田としては珍しく関西に向き、「断絃会」において〈翁〉（シテ金剛巖、開口福王茂十郎、笛島田巳久馬、小鼓幸祥光、大鼓亀井俊雄、太鼓金春惣右衛門）、〈高砂・真ノ型・流八ツ頭・七五三出端〉（シテ同上）、〈田村〉（シテ梅若実）、〈関寺小町〉（シテ金春光太郎）、〈蟬丸〉（シテ宝生九郎、ワキ野口兼資）、〈鷺〉（シテ喜多六平太 ※実代役）、〈石橋〉（シテ桜間弓川）の笛を三時間連続で吹き通したようである。これ以降も能界の記念すべき特別な催しに頻繁

に出演しているので、「能楽タイムズ上演データベース」や「現代能狂言上演記録データベース」等で公開されている番組も参照して、以下に主だったものを列挙してみたい。

昭和二十五年（一九五〇）

・〔井筒〕シテ観世華雪、ワキ野島信、笛島田巳久馬、小鼓幸祥光、大鼓吉見嘉樹、昭和二十五年十一月一日、昭和二十五年度文部省芸術祭参加公演、於水道橋能楽堂

昭和二十七年（一九五二）

・〔野宮・合掌留〕シテ観世華雪、ワキ宝生弥一、笛島田巳久馬、小鼓幸祥光、大鼓川崎九淵、昭和二十七年九月二十一日、観世華雪芸術院就任披露別会能、於水道橋能楽堂

・〔安宅・延年之舞・勸進帳・貝立〕シテ観世喜之、ワキ松本謙三、アイ三宅藤九郎・野村又三郎、笛島田巳久馬、小鼓幸祥光、大鼓吉見嘉樹、昭和二十七年九月十八日、矢来能楽堂舞台披記念日加寿能（第二日）、於矢来能楽堂

・〔高砂〕シテ観世華雪、笛島田巳久馬、小鼓北村一郎、大鼓安福春雄、太鼓金春惣一、昭和二十七年九月二十日、観世華雪芸術院会員就任 櫻間弓川文部大臣賞受賞祝賀能（第二日）、於水道橋能楽堂

・〔熊野・読次・村雨留〕シテ梅若猶義、ワキ野島信、笛島田巳久馬、小鼓幸祥光、大鼓亀井俊雄、昭和二十七年九月二十八日、梅猶会二十周年記念雪月花三番能、於水道橋能楽堂

・〔卒塔婆小町・一度之次第〕シテ観世喜之、ワキ宝生弥一、笛島田巳久馬、小鼓大倉六藏、大鼓亀井俊雄、昭和二十七年十一月十五日、昭和二十七年文部省芸術祭参加公演 先代観世喜之十三回忌追善能、於矢来能楽堂

昭和二十八年（一九五三）

・〔翁〕シテ嶋沢啓次、笛島田巳久馬、小鼓宮増豊好・宮増純三・敷村鉄雄、昭和二十八年四月二十九日、幸祥光

遠藤福次郎還暦祝賀能、於水道橋能楽堂

・(老松)シテ橋岡久太郎、ワキ松本謙三、笛島田已久馬、小鼓北村一郎、大鼓川崎九淵、太鼓金春惣一、昭和二十八年五月十五日、橋岡久太郎翁古稀祝賀能、於水道橋能楽堂

・(熊野・三段之舞)シテ桜間弓川、ワキ宝生弥一、笛島田已久馬、小鼓鶴沢寿、大鼓亀井俊雄、昭和二十八年十一月六日、昭和二十八年度文部省芸術祭参加公演、於水道橋能楽堂

昭和二十九年(一九五四)

・(鸚鵡小町)シテ宝生九郎、ワキ松本謙三、笛島田已久馬、小鼓幸祥光、大鼓川崎九淵、昭和二十九年二月二十八日、川崎九淵師芸術院会員就任祝賀能会、於水道橋能楽堂

以上のように、島田は数々の大きな催しで大役を果たしている。各流儀を代表する能楽師との共演も目立ち、一噌流宗家代理としての活躍ぶりが窺えよう。

最後に、島田が復曲能や新作能にも関わっていたことを述べておく。昭和二十六年(一九五二)十二月二十三日、観世華雪が「求塚再興発表会」において(求塚)を復曲上演したが、その笛を島田が勤めたことが「昭和二十六年(求塚)試演関係書類一式」(目録番号 A3-1)に示されている。この資料に含まれる観世元正よりの出演依頼状と島田からの返事に対する礼状より、島田は元正から直接依頼を受けていたことも判る。さらに昭和二十七年(一九五二)十二月七日には、喜多実と土岐善磨が宝生流から贈られた(綾鼓)を大幅に改訂して喜多流(綾鼓)を上演したが、その際の「立太子奉祝「綾鼓」復曲記念能」<sup>40)</sup>においても笛を勤めたことが「昭和二十七年(綾鼓)番組・頭付一式」(目録番号 A3-2)より判る。どちらも能の歴史に刻まれる復曲・新作であるが、こうした重要な舞台を任されていた様子からは島田が当代を代表する笛方として認められていたことが充分に窺えるのである。

## おわりに

昭和二十九年（一九五四）四月、島田は六十五歳で没した。沼艸雨による追悼文が『演劇評論』二に掲載されており、次のようにある。

荒い笛は他にもあり、弱い笛も他にある、又艶のあるのも他に聞ける、が強く美しい笛は島田氏に並ぶものがないが、<sup>xxiv</sup> かつた。

島田の笛が美しさと強さを兼ね備えていたことが高く評価されている。また、亡くなる前年度の昭和二十八年（一九五三）度に文化財保護委員会が川崎九淵、幸祥光の記録音源（S P）を作成しているが、島田も寺井政数、藤田大五郎らとともに笛方として参加し、〈船弁慶〉、〈春栄〉、〈是界〉、〔鷲乱〕、〔盤渉楽〕等の演奏を残していた。今回の報告をまとめるにあたり改めて聴く機会を得たが、艶やかで澄んだ音色と飄々とした趣きが印象的であった。呂中干形式の舞事の干を今より高い調子で吹いたり、今と異なる拍子当たりで〔早笛〕を奏したりするなど、現在の一噌流とは異なる奏法も窺われた。今後はこうした音源資料も詳細に分析しつつ、島田已久馬旧蔵資料の記述と照らし合わせながら、当時の演奏の具体相をみていくことも課題である。

※本論文は、法政大学能楽研究所「能楽の国際・学際的研究拠点」における平成三十一〜令和二年度公募型共同研究「能楽研究所蔵及び国立能楽堂蔵一噌流伝書の調査研究―演奏技法及び江戸期地方伝承の解明にむけて―」および令和三〜四年度公募型共同研究「一噌流の伝承研究―島田已久馬旧蔵資料と国立能楽堂蔵一噌八右衛門家資

料の調査―」に基づくものである(代表者…筆者、分担者…高桑いづみ氏、宮本圭造氏、山中玲子氏、協力者…中司由起子氏、深澤希望氏)。筆者と高桑氏が作成した「島田已久馬旧蔵資料目録」の成果を受けてまとめられた。同共同研究のメンバーには調査段階よりご助言を賜り、資料の翻刻においてもご教示を頂戴した。

## 注

i 島田已久馬旧蔵資料目録は、平成三十一(令和二)年度公募型共同研究「能楽研究所蔵及び国立能楽堂蔵一噌流伝書の調査研究―演奏技法及び江戸期地方伝承の解明にむけて―」および令和三(四)年度公募型共同研究「一噌流の伝承研究―島田已久馬旧蔵資料と国立能楽堂蔵一噌八右衛門家資料の調査―」に基づいて、筆者と高桑いづみ氏が作成した。同目録は法政大学能楽研究所「能楽の国際・学際的研究拠点」のホームページ(<http://kyoten-nohken.wshosei.ac.jp/unccategorized/2021/4037/>)において公開されている。

ii 「能楽タイムズ上演データベース」は「早稲田大学文化資源データベース」に収められている。上演情報は月刊誌『能楽タイムズ』(能楽書林、昭和二十七年)掲載の公演案内「今月の能」に基づく。 [https://archive.waseda.jp/archive/subDB:tophtml?arg=subDB:tophtml?arg=&item\\_per\\_page=20&orderby=:ASC&view=:display-simple;subDB\\_id=:70&&lang=jp](https://archive.waseda.jp/archive/subDB:tophtml?arg=subDB:tophtml?arg=&item_per_page=20&orderby=:ASC&view=:display-simple;subDB_id=:70&&lang=jp)(最終閲覧日令和四年八月二十三日)

iii 「現代能狂言上演記録データベース」は「早稲田大学文化資源データベース」に収められている。上演情報は坪内博士記念演劇博物館が収集した能・狂言の上演資料に基づく。 [https://archive.waseda.jp/archive/subDB:tophtml?arg=&item\\_per\\_page=20&orderby=:ASC&view=:display-simple;subDB\\_id=:32&&lang=jp](https://archive.waseda.jp/archive/subDB:tophtml?arg=&item_per_page=20&orderby=:ASC&view=:display-simple;subDB_id=:32&&lang=jp)(最終閲覧日令和四年八月二十三日)

iv 島田已久馬「蒔絵を棄て、」『能楽画報』大正八年九月号、能楽書院。

v 以下、番組の詳細は確認できた範囲にとどまる。底本の記載を基本とするが、明らかな誤りは訂正した。人名に「師」が

付されている場合、「師」を略した。個人蔵の舞台名に「氏」が付されている場合も「氏」を略した。なお、本論文を通じて能の演目名にはへ、囃子事名には（ ）を付した。

vi 島田已久馬旧蔵資料の小鼓手付の一部には「諸藤已久馬」の署名もみえる。「諸藤」は島田の別姓と思われるが、由来は不明である。

vii 島田已久馬「蒔絵を棄て、」『能楽画報』大正八年九月号、能楽書院。

viii 幸清次郎「邪論を排す」『能楽画報』明治四十四年三月号、能楽書院。

ix 坂元雪鳥「喜之陣頭に立つ―九皇会の袴能―」（明治四十四年五月）、『坂本雪鳥能評全集』上巻所収、昭和四十七年、豊島書房。

x 「観世九皇会の歩み」『矢来能楽堂再建五十周年記念・観世九皇会の歩み』、『観世九皇会の歩み』編集委員会編、北泉社、平成十四年。一〇三頁。

xi 坂本雪鳥「弱者に同情の余り―九皇会催能―」（明治四十四年六月）、『坂本雪鳥能評全集』上巻所収、昭和四十七年、豊島書房。

xii 坂本雪鳥「幸清翁の気焔―九皇会袴能―」（明治四十四年七月）、『坂本雪鳥能評全集』上巻所収、昭和四十七年、豊島書房。

xiii 破門中の島田が出勤した九皇会以外の舞台として、調査の範囲では「鷺畔翁亡母追善能」（大正三年四月）と幸清会（大正三年四月、大正四年四月、同年六月）を確認している。ただし、前者は鷺畔翁、後者は幸清次郎が主催しているので、どちらも九皇会周辺の催しと位置づけられよう。

xiv 坂元雪鳥「芸は正確だけでよいか―九皇会発会」（大正三年一月）、『坂元雪鳥能評全集』上巻所収、昭和四十七年、豊島書房。

xv 「幸清次郎翁の和解」『国民新聞』大正四年八月七日、国民新聞社。（参照は『能楽』大正四年九月号、百十一頁）

- xvi 坂元雪鳥「能楽界時事」『能楽』大正四年十二月号、能楽館。
- xvii 再入門後も大正六年から昭和三年までに次の⑦～⑫の六通の相伝免状が発行されている。皆伝は昭和三年発行の⑫である。免状の内容は以下の通り。⑦一 獅子／右今般伝授相済候事／如仍件／大正六年三月／十一世一噌又六郎／島田巳久馬殿、
- ⑧一 道成寺／右相伝致候／大正八年十月／一噌又六郎／島田三熊殿、⑨一 安宅／延年舞／右相伝致候／大正十三年十二月／一噌又六郎／島田三熊殿、⑩一 宝生流／安宅／延年舞／右相伝相済候／大正十四年十二月／一噌又六郎／島田巳久馬殿、
- ⑪一 鷺／右御相伝申上候／昭和二年九月／一噌又六郎／島田巳久馬殿、⑫一 皆伝／右相伝相済候／昭和三年十二月／一噌又六郎／島田巳久馬殿
- xviii 〈俊寛〉シテ観世喜之、ワキ西村龍六、笛島田巳熊、小鼓福井初太郎、大鼓永田寅之助。〈小袖曾我〉シテ谷村直次郎、ツレ大槻十三、笛島田巳熊、小鼓幸円次郎、大鼓吉田秀夫。〈柏崎〉シテ橋岡久太郎、笛島田巳熊、小鼓青木恒治、大鼓永田寅之助。〈乱〉シテ橋岡久太郎、ツレ谷村直次郎、ワキ栗崎清之、笛島田巳熊、小鼓瀧村立太郎、大鼓古田秀夫、太鼓鬼頭為太郎。
- xix 〈海人〉シテ喜多六平太、ワキ三好二郎、笛島田三熊、小鼓福井初太郎、大鼓大倉宣利、太鼓松村隆司、於九段能楽堂。
- xx 法政大学鴻山文庫蔵「新曲忠霊発表能組」による。島田は第一回の公演に出演している。第一回の出演者は次の通り。シテ橋岡久太郎、ツレ武田太加志、ワキ豊島要之助、ワキツレ永井重安・稲葉直巳、アイ山本東次郎、笛島田巳久馬、小鼓宮増豊好、大鼓安福春雄、太鼓宇野親一。なお、第二回のシテは梅若万三郎、笛は寺井政数、第三回のシテは観世鏡之丞、笛は一噌鏡二である。閲覧は「野上記念法政大学能楽研究所能楽資料デジタルアーカイヴ」による。https://nohken.ws.hosei.ac.jp/nohken\_material/htmls/index/pages/y20/KZ53-101.html(最終閲覧日令和四年八月二十五日)
- xxi 島田は昭和二十九年(一九五四)に没するまで宗家代理を務めた。島田没後は一噌正之助が宗家代理を引き継いだ。
- xxii 「一噌流家元代理」は番組表の裏に鉛筆書きされており、下書きだった可能性もある。
- xxiii 〈綾鼓〉シテ喜多実・友枝喜久夫、ワキ松本謙三、アイ山本則寿、笛島田巳久馬、小鼓北村一郎、大鼓安福春雄、太鼓柿



xxiv 本豊次、昭和二十七年十二月七日、立太子奉祝「綾鼓」復曲記念能、於水道橋能楽堂。  
沼艸雨「龍吟今やなし」『演劇評論』一六、昭和二十九年五月号、演劇評論社。